

キリストによって生きる

奨励	関 雅人〔せき・まさと〕
奨励者紹介	日本キリスト教団大津東教会牧師

実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者をつの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。

(エフェソの信徒への手紙 2章14―16節)

はじめに

本日は、「キリストによって生きる」とは、どういうことだろうということを考えながら、私の50年近くの牧師としての生活のなかで一番印象的だったこと、これからもきっと忘れられないであろうことをお伝えしたいと思います。

私の所属する日本キリスト教団京都教区は、滋賀県と京都府約70の教会の集まりです。各教会と連絡を取るための京都教区事務所は、同志社大学今出川校地の近くにご 있습니다。京都教区事務所の礼拝堂の壁に、見事なハングル語の額がかかっています。これは、日本キリスト教団京都教区と韓国基督教長老會大田(テジョン)老會と、相互交流、兄弟姉妹の交わりに入ろうという取り決めをいたしまして、その調印式を韓国で行った際、そのお土産に記念品としていただいたものです。それを掲げているのです。

大田老會と
京都教区の交流開始

日本キリスト教団京都教区は、それほど大きな教区ではありません。大田老會(日本でいう教区と同じような集まり)も、教会数は、ほぼ同じ数ぐらいなのですが、信徒数は一桁も二桁も違うくらい多いのです。お互いに兄弟姉妹の交わりを結ぼうじゃないかという大田老會からの申し入れがありました。そのとき、私たちは非常にうれしい話でありましたけれども、緊張しました。教団としては韓国の三つの教派、教団との交流、宣教協約は結んでいたのですが、教区単位の交流は、まだはじまっていませんでした。

さて、どんなふうに進めたらよいのだろうか。何度も日本と韓国を行ったり来たりしながら、合意文書や声明文等々を練りあわせ、作りあげました。1998年6月30日、韓国基督教長老會大田老會ハンパツ教会において、大田老會臨時總會が開かれ、京都教区からは私を含む3名が出席いたしました。調印のための礼拝式を行いました。両者の議長が合意文書、兄弟関係、交流を結ぶという誓約書の文書にサインをいたしました。署名のときに手が震えました。ただ私の名前を書きただけだったのですが、とても緊張しながらサインをしたことを覚えております。朗読されましたのが、今日、読んでいただいた聖句、エフェソの信徒への手紙2章14―16節でした。京都教区事務所の礼拝堂に飾ってあるハングル語の額の聖句でもあります。

私たちの気持ちも複雑でしたが、それよりも大田老會の、特に古い信徒の方々には、この調印式を非常に躊躇する複雑な気持ちがおありだったことを聞かされました。「なぜ私たちの教会が日本の教会と握手しなければならないのか。日本側から申し出てくるのならわかるが、私たちの方から日本の教会に対して握手しようという申し入れをする必要はないのか・・・」。そういう気持ちで、反対されていたわけです。当時は、まだ竹島等の領土問題は、今のようにさかんに議論はされていませんでした。しかし、1990年代、豊臣秀吉が朝鮮を侵略、19世紀頃には、朝鮮半島を侵略するために日朝修好条約を結んだり、日本の国の朝鮮半島、韓国に対する仕打ちはひどいものでした。なによりも第二次世界大戦のとき、どんなことを日本の国がしてきたかを私たちは忘れてはなりません。たとえば、強制連行。日本の至るところの炭鉱や工場で、特に危険なところに朝鮮半島から若者を強制的に連行してきて働かせ、多くの犠牲者を出した。日本軍慰安婦の問題もあります。そのような残虐な行為、しかも、本当はそういう国の政策に対して否と言うべき立場であった日本の教会が、実は加担していたという歴史も、残念ながらあるのです。その日本の教会に「なぜ握手を求めていかなければならないのだ」という古老の思いはとても深刻であったと思います。

渋る古い方々を、京都教区と大田老會との兄弟姉妹の関係を結ぶことを進めようとした比較的若いリーダーたちが、一所懸命説得してくださったのです。説得するにあたって「自分たちの信じるキリストがなされたように、自分たちもキリストに従って生きようではないか。主が私たちを赦されたように、私たちが隣人を赦そうではないか」。それが今日の聖句だったわけです。キリストが十字架によって敵というものを滅ぼされ、互いに二つのものを一つにされた。それによって私たちは神と交わることができた。神の子となり、救われた。だから私たちが同じようにしようではないかと説得し、大田老會全体を動かし、1998年6月30日、調印の運びとなったわけです。

キリストによって生きる

本日この奨励のあとに皆さんにも一緒に歌っていただく讃美歌537番を、この臨時總會時にも歌いました。調印式の始まる前には、顔がこわばっている方々を多く見受けました。式が済んだ後、「私たちは本当に深いお詫びを申しあげたい」という声明を読みあげました。その後、多くの方に、にこやかに握手を求められて、肩を組んで讃美歌と一緒に歌うことができたのです。なかには、「実は私の背中には拷問の傷跡があるのです」、「私の肉親は日本軍に殺されました」という方もいらっしゃったのですが、その方々とも肩を組んで、讃美歌537番と一緒に歌うことができました。

その後も4回ほど韓国の教会に招かれ、礼拝に出席し、説教をしたときも、この歌を歌いました。肩を組んで歌い、私たちは日本語で歌います。韓国の教会の人たちはハングル語で歌いますが、内容的には同じだろうと思います。

「キリストによって生きる」ということは、キリストが十字架につけられながら、私たちが赦してくださった、その足跡を歩んでいく、その道を考えながら、生きていくことだと思います。また、私たちそれぞれが、今「どう生きているか」という問いかけでもあると思っています。